

ガリヴァーの出自

橋 沼 克 美

『ガリヴァー旅行記』第一部「リリパット航海記」の冒頭の4つの段落は、物語の語り手レミュエル・ガリヴァーの生い立ちと、遠い国々への航海に出るまでの経緯を述べた部分である。通常この部分は、架空旅行記の架空の作者ガリヴァーの架空の出自を述べたもので、「本当らしさ」を醸し出すための付随的な、いわば制作上の小道具として理解されている。そこに述べられている個々の「事実」の真偽を問題にする必要はないが、ガリヴァーの社会的性格および語り手としての資格を考える上で、この冒頭の部分は多くのことを示唆してくれるので、もっと注意が払われてしかるべきであろう⁽¹⁾。小論では、あまり顧みられないこの部分を解説するという形で、ガリヴァーの出自について考察してみたい。

◆「私の父は、ノッティンガムシャーに小さな地所をもっていた。男の子が五人いて、私はその三番目であった。」(3)⁽²⁾

◆「ガリヴァー氏は父君が住んでおられたノッティンガムシャーの生れですが、同家はオクスフォードシャーに代々住んでいたと、私は彼から聞いたことがあります。その証拠に、オクスフォードシャーのパンペリの墓地にガリヴァー家の墓や碑がいくつかあるのを私はこの目で見ました。」(「出版社より読者へ」)(xi)

ガリヴァーはブリテン島の真中の州に、中流階級の三男として生まれた。このことから、ガリヴァーはごく平均的なイギリス人として特徴づけられていることがわかる。しかし、スウィフトの伝記的事実に照らし合わせてみると、このような特徴は無作為に抽出されたものではないように思われる。スウィフトはダブリン生れで、姉がひとりいるが、男兄弟はいない。スウィフトの父はウェールズに隣接するヘレフォードシャーの生れで、六人兄弟の五番目である。スウィフト一族はヨークシャーに端を発し、ジョナサンの祖父はレスターシャーに住んでいた系統に連なる。レスターシャーはスウィフトの母とスウィフトの恩師サー・ウィリアム・テンブルの家系の縁りの地であり、スウィフトは母を訪ねてしばしば訪れたが、ノッティンガムシャーの南隣に位置する。また、スウィフトの生涯の「友人」エステル・ジョンソン(ステラ)の父は、スウィフトによれば「ノッティンガムシャーのまづまづの家の次男以下の子(“a younger son”)」であった⁽³⁾。

ガリヴァーという姓は、“gullible”(「だまされやすい、すぐ真に受ける」)という語から作られたともいわれるが⁽⁴⁾、実在する姓である⁽⁵⁾。これに関しては興味深いエピソードがある。

スウィフトの親友で詩人のアレクサンダー・ポープは、『ガリヴァー旅行記』が出版された半年後、知人から送られてきたアメリカのボストンの新聞の中に、ジョナサン・ガリヴァーなる議員の名前があると、スウィフトに手紙で伝えた。スウィフトはポープへの返事の中で、そういえば知り合いの弁護士の情報によれば、ある裁判でレミュエル・ガリヴァーという男が嘘つきという評判のために敗訴したと述べて、不思議な偶然の一致に驚いている⁽⁶⁾。

私見だが、Lemuel Gulliver の名はスウィフトの恩師 William Temple (ラテン語にすれば Gulielmus Temple) のアナグラム (Gulliu•Lem•e[t]) に近い⁽⁷⁾。

ガリヴァー家のルーツはバンベリにあると「出版人」はいつているが、実際、18世紀に“Samuel Gulliver”という宿屋の主人がこの町にいた。スウィフトは『ガリヴァー旅行記』を出版する数ヶ月前にバンベリの近くに滞在したことがあるので、この宿に泊まった可能性もある⁽⁸⁾。ガリヴァーの出自に関する細かな事実は、まるっきりでたらめではないのである。おそらく、スウィフトは彼の交際範囲の中のわかる人にだけわかるように、一見些細に思われるような事実をちりばめているのではないだろうか。

◆「父は私が十四歳の時に、ケンブリッジ大学のエマニュエル・カレッジに私をやってくれた。寮生活を三年間おくり、その間みっちり勉強したが、ここでの経費が(もちろん僅かながら小遣も貰ってはいたが)大した財産もないわが家にとっては大きな負担だった。」(3)

スウィフトは14歳でダブリン大学トリニティ・カレッジに“commoner”(自費学生)として入学した。スウィフトの父は息子の誕生を見ずに死んだ。スウィフトの教育費は、叔父たちが支出したといわれる。だが、大学では「近縁のひどい扱いのために意気消沈した」と、スウィフトは後年述懐している。おそらく、ガリヴァーのように、十分な経済的援助がなかったために、スウィフトは満足のいく大学生活を送れなかったものと思われる。当時、大学に入学する年齢として14歳は早いほうだったが、特に珍しくはなかった⁽⁹⁾。

ケンブリッジ大学のエマニュエル・カレッジは、テンブルが学んだところである。テンブルはこのカレッジに16歳で入学したが、ジェントルマンの子弟の多くがそうであったように、学士号を取らずに大陸旅行に出ている。テンブルの父はナイトで、アイルランド記録保管官(Master of the Rolls)だったが、それでも長男ウィリアムの大学の学費を捻出するのに容易ではなかったという。現在のイギリスのように奨学金制度が充実していなかったスウィフトの時代に、大学の教育費が高つくのは当たり前の事実であって、ガリヴァーが就学中に経済的な問題で悩んだというのは、すぐれて現実的な描写であったと思われる⁽¹⁰⁾。

◆「ロンドンの高名な外科医ジェイムズ・ベイツ氏の徒弟となり、そこで4年間働めた。時々父が僅かながら金を送ってくれたので、その金で航海術とかその他のろんな数学、つまり旅行でもしようという人間にさしずめ役に立つ学問を勉強した。」(3)

スウィフトの時代の外科医は、他の「職人」たち同様に、親方に付いて通常7年間徒弟として修業してはじめて、一人前の開業医となることができた。外科医の場合、ロンドンでは床屋外科医組合が開業に際しての資格審査機関であった。しかし、ガリヴァーのように大学教育を受けることが必ずしも外科医となるための条件ではなかった。大学の学位は医師

(physician)として開業するための条件であって、そのために、外科医は医師よりも一段低い存在とみなされていた。医師の名前には“Dr.”をつけるが、外科医の名前には“Mr.”をつけるのが慣習であったのは、そのひとつの表れである⁽¹¹⁾。

ふたりのスコットランド出身の医師たち、ジョン・アーバスノットとウィリアム・コバーンは、スウィフトとほぼ同年齢（前者は同い年、後者は2歳年下）で親しかった。アーバスノットは、文人医師として世に出る前、ロンドンでウィリアム・ペイト（ペイツ親方と似た名前である）という博學な織物商の許に寄宿し、「数学の」家庭教師をしていた。コバーンはライデンに学び、英国海軍の軍医を勤めた⁽¹²⁾。

ガリヴァーが教育を受けた17世紀には、医師たちは専門以外にも幅広く教養を身につけていることが求められた⁽¹³⁾。ガリヴァーは「余りに多くの医者仲間の不正診療をまねするには良心が許さなかった」(4)ぐらいにしっかりした医療倫理の持ち主であるばかりでなく、17世紀末の医師の理想像に近いものを学校教育と独学によっても身につけているのである。

「航海術とかその他のいろんな数学」とガリヴァーがいうのは、地図を正確に読むためには球面三角法などの数学的知識を要するからである⁽¹⁴⁾。「ペイツ氏」なるロンドンの高名な外科医は実在しないが、広く読まれた処方箋の手引書「ペイト医心方」(*Pharmacopoeia Bateana* [1690])の著者は、ジョージ・ペイト (?-1669)という医師である⁽¹⁵⁾。

◆「将来いつの日か旅行に出る、それが俺の運命なのだ、とかねてから信じていたからであった。」(3)

このような言明は、17・18世紀によく読まれた旅行記の作家たち（その中には医師たちも少なくない！）にはつきものである⁽¹⁶⁾。スウィフトは同時代の読書人たちの例にもれず、旅行文学の愛読者だった。旅行記作家の口吻を細部にわたるまで模倣している例は、『ガリヴァー旅行記』のいたるところにみられる。実際、後年のスウィフトは、長い間に多くの旅行文学を読破したおかげで食傷気味であった。模倣が時に皮肉な調子を帯びることがあるのはそのためである。

◆「ライデンへと赴き、そこで2年と7カ月、将来長い航海に出た場合などに役立つものと思って、医学を勉強した。」(3)

ライデン大学は当時、ヨーロッパで屈指の医学教育を誇っており、医師を志す英国人たちの中にこの大学に学んだ者は多い。ジョン・ロックやバーナード・マンドウィルがその顕著な例だが、スウィフトと親しかった医師たちの幾人かも同じ道をたどっている⁽¹⁷⁾。とはいえ、外科医に付いて修業し、ライデンで医学を学んだ者は少なかったと思われる。エマニュエル・カレッジ出身という条件も含めると、ガリヴァーと全く同じ教育歴をもつような医師は、筆者が調査した限りでは見当たらない。医師ガリヴァーは、当時の医師や外科医の平均的学歴を部分的に寄せ集めたものであり、特定の実在の人物をモデルにしているとは考えにくい。

スウィフトの同時代の医師たちに古典や博物学など専門以外の学問に秀でた人材は少なかった。アイルランド出身の医師で、王立協会および王立医師会の会長になったハンス・

スロウンや前述の『ジョン・ブル物語』で知られるアーバスノットがその例である。しかし彼らは“physician”であって“surgeon”ではない。外科医であるガリヴァーが、航海の間「暇なときには古今の優れた著者のものを読んだり、その土地の住民の風俗や気質を観察したり、言葉を習ったりした」(4) ことによって、狭い専門だけでなくより十全な教養を身につけているという点が注目に値する。ガリヴァーは「近代的」教養だけでなく、伝統的教養をも身につけた、一介の外科医としては稀にみる人物なのである。よく類似が指摘されるロビンソン・クルーソーとの違いは、ガリヴァーの十全な教養なのである。

◆「ライデンから帰国してまもなく、昔師事したペイツ氏の推薦でスワロー号の船医となった。船長はエイブラハム・パネルといい、私はこの人の下で3年半勤務した。」(3)

スワロー号、そして、後にガリヴァーが乗り組むアンテローブ号、アドヴェンチャー号はいずれも実在の船の名前であったことがわかっている⁽¹⁸⁾。パネル船長なる人物は特定されていないが、後にガリヴァーが乗った船の船長たちの名前 (Prichard, Nicholas, Wilcocks, Pocock) はいずれもありふれた姓である。

◆「オールド・ジュリの一角に小さな屋敷を手に入れ、いつまでも独身生活を続けるのはよくないと忠告を受けたのを機に、ニューゲイト街でメリヤス業を営んでいたエドモンド・バートン氏の二女メアリ・バートンと結婚した。その際、持参金として400ポンドを受け取った。」(4)

オールド・ジュリとニューゲイト、そしてガリヴァーの引越先であるフェター・レインとウォビングはロンドンの実在の地名である。ニューゲイト街とメリヤス業への言及はデフォーを連想させる。デフォーは若い頃メリヤス商人をしていたことがあるし、また、ニューゲイト監獄は彼が入ったことのある場所としてよく知られている⁽¹⁹⁾。

結婚から2年後ガリヴァーは、恩師ペイツ氏が死んで開業の景気が悪くなったので、妻や友人と相談した結果、もう一度船に乗る決心をした。◆「次々に2つの船の船医となって、6年間東インドや西インド諸島に数回に渡る航海をした。」(4) 3年後、◆「アンテローブ号の船長で、ちょうどこれから南海めざして出帆しようとしていたウィリアム・ブリチャードという人が、好い条件で私に乗船をすすめてくれたので、引き受けることにした。」(4)

「西インド諸島」と「南海」が、当時の英国およびヨーロッパにとってどれだけの呪縛的な魅力をもっていたかをみるには、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』の大好評と1720年の南海泡沫事件（先頃の日本の金融バブルとの類似はあまりに明らかである）の狂乱を挙げれば十分であろう。スウィフトが旅行記の愛読者だったことは先に述べたが、未知の国に対する興味は、フランスやスペインとの植民地争奪あるいはヨーロッパの列強間での覇権争いという文脈においてみれば、単に異国趣味というだけでなく、すぐれて政治的な意味合いもあったことは、『ガリヴァー旅行記』の最終章（実質的には「あとがき」である）に明らかである⁽²⁰⁾。

小論は『ガリヴァー旅行記』の冒頭部分にあまりに多くのことを読み込みすぎたきらいが

あるが、この作品を、特に第一部と第二部を、スウィフト自身の伝記のアレゴリーとして読むことの妥当性を示すためのひとつの試みである⁽²¹⁾。

ガリヴァー年譜

- 1661年 ノッティンガムシャーに生まれる。
- 1675年 ケンブリッジ大学エマニュエル・カレッジに入学。
- 1678年 ロンドンの外科医ジェイムズ・ベイツの徒弟となる。
- 1682年 里帰りの後、ライデン大学で医学を学ぶ。
- 1685年 スワロー号の船医となる。
- 1689年 ロンドンで開業。メアリ・バートンと結婚する。
- 1691年 ベイツ氏の死後再び船医となる。
- 1697年 ロンドンで開業。オールド・ジュリ、フェター・レイン、ウォビングと居所を変える。
- 1699年 アンテロープ号の船医として南海へ向かう。
- 1701年 リリバットを去り、英国船に救出される。
- 1702年 ケント州沖合の投錨地ダウンズに帰国。2カ月後アドヴェンチャー号でスーラトに出発。
- 1706年 ブロプディンナグからの脱出から9カ月後、ダウンズに帰還。その2カ月後ホープウェル号で東インドに向けて出帆。
- 1709年 ラグナグを去り長崎へ。
- 1710年 オランダ船アンポイナ号でアムステルダムへ。そこからダウンズに帰還。5カ月後アドヴェンチャー号の船長としてポーツマスから西インド諸島に向かう。この間妻メアリが身籠もる。
- 1715年 フィヌム国を去りリスボン経由でダウンズに帰着。

注

1. 次に挙げる研究は、冒頭部分についてある程度触れている。Donald Greene, "The Education of Lemuel Gulliver" in Peter Hughes and David Williams, eds., *The Varied Pattern: Studies in the Eighteenth Century* (Toronto: A. M. Hakkert, 1971), pp. 3-20; Howard Erskine-Hill, *Jonathan Swift: 'Gulliver's Travels'* (Cambridge: Cambridge UP, 1993), pp. 19, 22; Arthur E. Case, *Four Essays on 'Gulliver's Travels'* (1945; rpt. Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1958), pp. 114-5; Edward A. Block, "Lemuel Gulliver: Middle-class Englishman," *MLN* 68 (1953), 474-7.
2. 『ガリヴァー旅行記』のテキストとしては、Paul Turner, ed., *Gulliver's Travels* [World's Classics] (Oxford: Oxford UP, 1986) を用いた。翻訳は、中野好夫訳 (新潮文庫, 1978) と平井正穂訳 (岩波文庫, 1983) を参考にし、訳文は適宜変えた。引用

部分は本文の () の中に Turner 版のページ数のみを示した。

3. Irvine Ehrenpreis, *Swift: The Man, His Works, and the Age*, 3 vols. (London: Methuen, 1962-83), Vol. I, pp. 6-7; Herbert Davis, et al., eds., *The Prose Writings of Jonathan Swift*, 16 vols. (Oxford: Basil Blackwell, 1939-74), V, p. 227.
4. Turner, p. 307.
5. P. H. Reaney, *A Dictionary of British Surnames*. 2nd ed. (London: RKP, 1987)によれば, Gulliver 姓は古フランス語の *goulafre* (=glutton) を語源とする。筆者の調査では, 18世紀のノーサンプトンシャーにも Gulliver 家が存在した。*Northamptonshire Administrations and Inventories 1711-1800* (1986) の 1711年, 1716年, 1722年の項参照。
6. Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift*, 5 vols. (Oxford: Oxford UP, 1963-65), III, pp. 273, 285.
7. 『ガリヴァー旅行記』にみられるテンブルの影響については Ehrenpreis, III, pp. 455-57; William Gary Olson, *A "Likeness of Humours": The Influence of Sir William Temple upon Jonathan Swift* (published Ph. D. dissertation, University of Washington, 1983), pp. 182-243 を参照。
8. Turner, p. 309; Williams, *Corr.*, III, pp. 150-51.
9. Ehrenpreis, I, pp. 64-5; *PW*, V, p. 192.
10. G. C. Moor-Smith, ed., *The Early Essays and Romances of Sir William Temple Bt.* (Oxford: Clarendon Press, 1930), p. 5; Homer E. Woodbridge, *Sir William Temple: The Man and His Work* (N. Y.: MLA, 1940), pp. 10-11.
11. Bernice Hamilton, "The Medical Professions in the Eighteenth Century," *The Economic History Review*, 2nd Ser., 4 (1951), 141-69.
12. *DNB*, s. v.
13. James L. Axtell, "Education and Status in Stuart England: The London Physician," *History of Education Quarterly* 10 (1970), 141-59.
14. Isaac Asimov, ed., *The Annotated Gulliver's Travels* (N. Y.: Clarkson N. Potter, 1980), p. 5.
15. G. N. Clark, *A History of the Royal College of Physicians of London*, 2 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1964), II, p. 460.
16. Arthur Sherbo, "Swift and Travel Literature," *MLS* 9 (1979), 117, 119, 124.
17. 拙論「スウィフトと医師たち」(『一橋論叢』第118巻第3号, 1997年9月号に掲載)。
18. Maurice J. Quinlan, "Gulliver's Ships," *PQ* 46 (1967), 412-17.
19. Paula Backscheider, *Daniel Defoe: His Life* (Baltimore, Md.: Johns Hopkins UP, 1989), pp. 41, 106-24.
20. John Carswell, *The South Sea Bubble*. 2nd ed. (Stroud, Gloucesters.: Alan Sutton, 1993).
21. Ehrenpreis, III, p. 456.